

(10) 聖なる公同の教会

村上伸

マルコによる福音書 12 章 1 節-12 節

今日は「聖なる公同の教会」について話したいと思います。今日読んだ聖書の個所が普通教会についてよく読まれる個所ではないので、不思議に思われたかたもあるかと思いますが、その意味はのちほど明らかにいたします。教会のことをギリシャ語で「エクレシア」と言います。「エク」というのは「外へ」という意味ですね。「クレシア」は「カレオー」という動詞から来ています。つまり「呼び出された者たちの群れ」という位の意味だったろうと思います。使徒言行録の 2 章を読みますと、そこにはペンテコステの日に起こった出来事が書いてあります。使徒達の上に神の霊が下り、新しく教会が誕生してまったく力強い宣教の働きが始まったというのです。つまり霊が下った時に、人間中心的な考えに基づいたありきたりの生活から、彼らは呼び出されたのです。そしてある特別な集まりを形成しました。

使徒言行録によりますと、持てるものを全て共有にし、一緒に食事をしたり、祈りを共にしたりした。そして全ての人々から尊敬され、注目されていたということが書いてあります。沢山の人が彼らの語る言葉によって心を打たれて洗礼を受けたりもしました。千人が洗礼をうけたと書かれています。つまり、大変力強い群れがそこに形成された。いわゆる一般の生活から呼び出されたある特別な群れがそこにつくられたと考えてよろしいと思います。

エクレシアとは、そういう意味です。呼び出された人々の群れ。英語やドイツ語では、「チャーチ」といったり「キルヒエ」とか言ったりしますね。その元になっている言葉はあのサークル、「円」を意味するチリクルスというラテン語だと言われていいます。これもちょっと似ているところがありまして、周りの世界からは区別された特定の限られた場所を示したものです。そのことが暗示していますように、教会というのは聖霊によって呼び出され、神からの使命を与えられて、その特別な使命のために祈りを中心にして集まる群れのことです。人間的な関心によって作られたものではありません。

人々が共通の関心によって集まってきて、何々の勉強をするためにサークルを作ろうではないか、あるいは何か一つの事業をするためにみんなが協力しようではないかという目的のために作られた団体というのではないのです。5 日位前でしたか、新聞の経済欄に、日本のあるプライダル産業の業者がインドネシアのバリ島にりっぱな教会を建てる計画であると、小さな記事になって載っていました。それには甘ったるい名前がついておりました。三鷹に、あるホテルの建てた小さな教会堂がありますが、それは「セントポーリア教会」というのです。わたしは最初はセントポールかと思っていたのですが、セントポーリアです。あのかわいらしい花の名前です。それに似た甘ったるい名前がついていました。そしてその業者は、バリ島の地元の教会の牧師とかホテルと提携して、夢のような結婚式を演出する計画であるというんですね。年商何億とか何十億とか言います。とにかく大層な計画です。

世間というものは逞しいものでして、商売になると思えば、教会でも何でも利用す

る。私の感じでは、この業者はやがて牧師を養成し始めるのではないかと思います。同じような話なんですが、前に愛知県の安城におりましたときに、今からかれこれ 40 年近くも前ですが、私は若い経験のない牧師でしたけれども、その町に一つの私立学校がありまして、その創立者の方がある日私のところにこられて、相談を持ちかけてきました。相談の内容はこういうことであります。今度豊橋にもう一つ学校を創る。そっちのほうは「ミッション式で」やりたい。ノウハウを提供してくれないかというのです。閉口致しまして、勿論お断りしましたが、そういうふうにはミッション式でやると生徒が集まるだろうというもくろみです。「ミッション式」というのもおかしなものですが、そういう関心があって、キリスト教を利用する動きがこの世界にはいろいろとあります。

いうまでもないことですが、教会というものはそういう関心から始まったものではありません。しかし、うっかりすると神の意志に従って生きていくということよりも、そこに集まっている人間の関心のほうが重く見られていくということが起こり得ます。歴史上しばしば起こりました。それは、ある王様の支配のためであったり、あるいはある有力な事業家のためであったり、そういう形で教会の中にも神の意志よりも人間の関心が優勢になる。そういうことが歴史上たびたび繰返されました。そういうことがありますから、今お話ししたような世間がキリスト教を利用して商売をすることは、そう簡単には笑えない。そういうことは教会の中にもあるわけです。教会はそういうものではありません。いかなる意味でも、人間の関心がまずあって、それによって創られた機構と団体ではない。聖霊によって呼び出された存在、そして神から与えられたある特別な使命のために励んでいく。そういう集まりであります。人間の関心によるのではなく、この世界に対する神の関心によって基礎づけられた聖なる場所です。

私は、現実の教会をことさらに神聖化してみるつもりはありません。教会を構成するのはやはり人間ですから、その中にはありとあらゆる人間的な要素も紛れ込みます。さっきも言いましたように、教会の中にも誤りも不真実もある。それを私たちは知っています。しかしそれにもかかわらず教会というものの最も深い基盤には神の意志が働いていると私は信じます。聖霊が働いている。だからそれは聖なる教会と呼ばれます。そのことを私たちの教会は、昔から伝統的に、切実な思いを込めて告白してきました。「我は聖霊を信ず。聖なる公同の教会を信ず。」そういう形の告白が使徒信条の中に出てくるのはそのためです。

ですから、私たちもそのことを告白する。みくに伝道所も聖なる教会です。上原教会もそうです。そして二つの教会が合併してまもなく新しく代々木上原教会というのが誕生しますけれども、それも聖なる公同の教会であると私たちは信じて告白致します。それはただ神の聖霊によって基礎づけられた群れであるからです。

今日私は説教のテキストにマルコによる福音書の 12 章を選びましたけれども、そこには直接には教会についての話は何も出て来ないように見えます。しかし先週の日曜日に私が経験いたしましたことがずっと心に残っておりまして、どうしてもこれは皆様にお伝えする義務があると感じましたのでここを取って選ばせてもらいました。

先週の日曜日に旧東ベルリンのホフヌングスキュヒエという教会（希望の教会）の礼拝に出席したのです。私たちが親しくしているカミンスキーさんご夫妻がその教会の熱

心な会員ですので私は今度学生たちを連れてドイツへ研修旅行に行くときに、前もってカミンスキーさんに手紙を書きまして、23日の日曜日にはあなたの出ていらっしゃる教会に行きたい、ちょっと人数が多いのだけれども礼拝に出ても良いだろうか。また、礼拝の後で変革後の状況についてカミンスキーさんのお話を聞きたいと申し入れをしてありました。快く承諾してくださいましたので私たちは喜んでそこへ行ったのです。教会の前に着いたときに夫のクルトさんが急ぎ足に教会から出てまいりまして、妻が高熱を発して1週間寝たきりである。今日もでて来られない、大変申し訳ないが皆さんによろしくというお話でした。私たちはちょっとがっかりしたのですが、とにかく礼拝に出席しようということで中に入りました。

りっぱな教会堂を持っています。しかし、その教会堂を冬寒い時に暖房するのに1日300マルクのお金がいる。そのお金がない。今、ドイツの教会、特に旧東ドイツの教会は経済的に大変困っています。そこで脇にある小部屋を暖めて、そこを冬の間の臨時の礼拝所にして、そこで礼拝をしていました。その日、説教のテキストとして読まれたのが、この個所でした。ぶどう園と農夫の譬えです。牧師はこう言いました。このぶどう園と農夫のたとえは、端的にこの世界を表わしている。世界は初めは平穩無事だった。ぶどう園を基盤にした生産作業が行われて、それに見合う利潤も期待されている(1節、2節)。「ある人がぶどう園を作り、垣を巡らし、搾り場を掘り、見張りのやぐらを立て、これを農夫たちに貸して旅に出た。収穫の時になったので、ぶどう園の収穫を受け取るために、僕を農夫たちのところへ送った」。ここまでは平穩で、ごく日常的な経済活動、生産活動です。そこではまだ何も起こっていません。

しかし収穫のときになると突然農夫達はよくばりになったと書いてあります。「だが、農夫たちは、この僕を捕まえて袋だたきにし、何も持たせないで帰した。そこでまた、他の僕を送ったが、農夫たちはその頭を殴り、侮辱した。更に、もう一人送ったが、今度は殺した。そのほかに多くの僕を送ったが、ある者は殴られ、ある者は殺された。まだ一人、愛する息子がいた。『わたしの息子なら敬ってくれるだろう』と言って、最後に息子を送った。農夫たちは話し合った。『これは跡取りだ。さあ、殺してしまおう。そうすれば、相続財産は我々のものになる。』そして息子^を捕まえて殺し、ぶどう園の外にほうり出してしまった。」(3~8節)そういう話です。

牧師は、この世はしばしばそのようであると言いました。そして一枚の絵を会堂の前のほうにスライドで写し出しました。それはヒエロニムス・ボシュの絵です。帰ってきて自分の書斎を調べたら、その絵が見つかりました。このヒエロニムス・ボシュは15世紀のオランダの画家です。この絵は「十字架をになうキリスト」という題が付いておりまして、真ん中に十字架を背負うキリストがいます。言うまでもなくゴルゴタに向かって歩いていく途中です。そしてその周りにいろんな人の顔が描かれています。教師はこう言いました。「キリストを十字架に付けようとしている人々の欲望にぎらつくような、憎しみに燃えるような顔がここにはある。その内の3人は目が飛び出るような顔をしている。世界はしばしばそのようである。欲望に動かされ、憎しみに突き動かされると皆このような表情になる。そういう人たちがキリストを取り囲んでゴルゴタの丘に連れていこうとしている。しかし、そういう醜い顔、憎悪や欲望にゆがんだ人々の顔だけでなく、この絵の中にはまるで人ごとのように目をそらしたり、傍観したりしてい

る人々の顔もある。キリストの苦しみを見過ごしている。世界はしばしばそのようだ」と彼は言いました。



私はその絵をみながら、おそらくそこにいた人は皆そうだったろうと思いますが、まさにそうだと心の中でうなずいていました。しかし牧師はさらにこう言いました。「だが、それだけだろうか。キリストを十字架に付けようとして悪意に満ちている人々の顔が回りを取りまいている。無関心に、人ごとのようにそれを見過ごしている人々の顔もその中にある。だけれどもそれだけだろうか」と彼は言いました。「もしも世界がただそれだけのものだとするならば、私たちには望みはない。私たちの世界がもしも憎しみや欲望にぎらつく人々だけ、無関心にキリストの苦しみを見過ごす人々だけであるならば私たちには望みはない。けれどもこの絵の中心には静かなキリストの顔がある。この世の憎しみや強欲や無関心に巻き込まれたりしないで、静かにそれに耐えて十字架をになっているキリストの顔がある。世界の中心にはこういう方がいらっしゃる。私達の世界にはたしかに醜い顔が満ち満ちているが、しかしその中心には静かな、本当に静かな良い方の顔が見える。これが私たちの世界ではないか」と彼は言いました。私たちの世界はそういう世界なのです。真ん中にそういう方がいる。忘れることが出来ないような具合にそういう方がいる。ただ悪だけの世界、醜いだけの世界ではない。醜さや悪を背負って静かにそれに耐えている、そういう方がこの世界の真っただ中にいらっしゃる！

マルコ福音書の12章に戻りますと、その牧師が続けてこう言いました。「今日のテキストを読むと、農夫たちが欲望に突き動かされて暴虐を働いたことが書いてある。暴

虐な農夫達の世界だ。しかし、それだけではない。同時に、主人（神）はその暴虐な世界に繰返し繰返ししもべ達を送り続けているということもまたここには書いてある」と彼は言いました。神はこの世界が悪いからと言って簡単に見捨てたりはしない。関心を持ち続ける。それは一人子の苦しみに至るまで徹底される、というのです。神はその一人子を賜ったほどにこの世を愛された。繰返し繰返ししもべ達が送られる。神のこの世に対する関心はやむことはない。例えどんなにひどいことがこの世の中で行われているとしても、この世は見捨てられてはいない。神の関心が注がれている。愛が注がれている。そういうのです。

私はその説教を聞いて大変心を打たれました。今日のテーマである「聖なる公同の教会」ということに話題に戻しますと、私は、教会というものはこのことを語り続けるためにこの世に置かれていると思っています。どんなに世が悪や暴虐や憎しみに満ちていても、本当だったら神様から見捨てられても文句を言えないようなものであるにしても、神はその一人子を賜ったほどにこの世を愛したもうた。繰返し繰返しその愛が示されている。繰返し繰返し呼びかけが行われている。神の言葉が与えられている。預言者が現れ、使徒達が現れる。教会というのはこのような神の愛を語り続ける場所ではないでしょうか。教会はこの世の欲望にぎらついた関心に巻き込まれません。巻き込まれてはならない。この世の真ただ中で十字架をになっているあの静かなキリストの姿をこの世に示し続ける。そして神がこの世に対して常に美しい関心を抱いていらっしやるということを語るために、この世に置かれている。キリストの身体としてこの世の真ただ中に置かれたもの、それが教会です。多くの過ちを犯してもきましたし、これからだって犯すかもしれません、しかしこのキリストのことを語るというその一事によって、教会は「聖なる」ものと呼ばれるのです。ですから私は聖なる公同の教会を信じる。そのことを、代々の聖徒達と一緒に、皆さんと一緒に告白したいと思います。

もう一つだけつけ加えて申し上げたい。ここには聖なる「公同の」教会と書いてあります。これは英語の「キャソリック」にあたる言葉ですね。もう少し解りやすくいうと、「普遍的な」という意味です。ある特定の民族だけに限定されない。ある特定の国家だけとか特定の人種だけのものでもない。人間が生きているところ、全ての人々に語りかけられている神の言葉をゆだねられているのが教会ですから、「普遍的な」教会といわれるのです。教会は狭い枠を超えます。

私たちの大変感動的な経験の一つは、よく外国の方々と出会うことです。韓国のキリスト教徒、中国のキリスト教徒、あるいは西欧のキリスト教徒と出会ったりします。民族は違い、言葉が違い、文化的な背景が違う。しかし、私たちの信仰は一つであることを実感いたします。深いところで私たちはつながっています。教会とはそういうものです。ある特定の民族だけのものというではありません。その意味でこれは「公同の」もの、「普遍的な」ものです。私たちの使徒信条の中にはわれは聖霊を信ずるという言葉がきた後に聖なる公同の教会を信ずるという言葉が出てきます。教会が「聖なる」ものであること、そして「公同の」ものであることをともに信じて告白するように、導かれたいと思います。

(日本基督教団みくに伝道所 1997年3月2日礼拝説教)